

## 新たな食料・農業・農村基本計画の策定に向けた公開討論会（北海道）概要

日 時：平成22年2月28日（日） 13:30～

場 所：ホテルポールスター札幌（北海道札幌市中央区）

### 概要

#### 1. 基調講演（佐々木政務官）

- ・環境には、自然をどのように守るかということと、農業を通じて耕作することによって守られる環境もある。農村や農村の文化、景色といった価値についても、農業がきちんと営まれて守られることが重要。
- ・60年代の農業基本法が99年に食料・農業・農村基本法に改められたように、食料と農村も含めて政策の中に組み込まれた。
- ・自給率の向上と農業の発展は一体のもの。自給率を41%から50%に高めていく手段として戸別所得補償制度に取り組んでいく。
- ・自給率の向上には39万 ha の耕作放棄地と現在不作付けの調整水田の活用が重要。
- ・6次産業化の推進と多面的機能の適切な評価とその対価が必要。
- ・GAP、トレサ、JAS、原料原産地表示などについては、生産者として安全な農産物を供給する責務と、消費者の信頼を担保するための手段としてしっかり取り組んでいく必要。

#### 2. パネルディスカッション第1部

ファシリテーター：飯澤 理一郎（北海道大学大学院農学研究員教授）

パネリスト：佐々木政務官

池野 富美子（コープさっぽろ理事 食の安全担当）

近江 正隆（（株）ノースプロダクション代表）

深川 由起子（早稲田大学政治経済学部教授 /

食料・農業・農村政策審議会企画部会委員）

牧 清隆（北海道農協青年部協議会会長）

食料自給率、戸別所得補償制度、6次産業化について討論。

食料自給率については、生産者と消費者のつながりについての議論が展開された。

戸別所得補償制度の導入については、一定の評価があったが、国民への理解浸透が課題との意見が挙げられた。

6次産業化の展開にあたっては、コーディネートする存在が重要との議論が展開された。

主な発言、意見は以下のとおり。

- ・ 食料自給率を上げるには、生産者の努力だけでは向上しない。消費者の協力が重要。生産と消費が連動して自給率を上げる道を考える必要。
- ・ 大都市は食料自給率が低いが、大都市の人こそ食料を自分のこととして考える必要。一方生産者は、消費者に支えられているということ意識する必要。
- ・ 戸別所得補償制度は、地域の取組や個々の努力が報われなくなる可能性もある。(佐々木政務官発言)これまで、地域にまかせていたため自給率が上がらなかった。村おこしや地域の戦略まで戸別所得補償で面倒をみるというのは無理があると思料。努力した人が報われるよう、色々な要素を組み込んでいきたい。
- ・ 消費者負担か財政負担かという、国民が公平に負担する観点から、税金で賄われる方が望ましい。可視化して説明責任を果たし、国民に示す必要。
- ・ 生産者が高付加価値化や直接販売に取り組んでいくのはよいが、全てを生産者が行うのは難しいので、プロデュース・コーディネートする人材が求められている。
- ・ 6次産業化について、アイデアがあってもそこにとどまっているものが多い。北海道は多くの食材を有し高いポテンシャルがあるのだから、そこに着眼し、国内市場や輸出市場にも目を向けてビジネスモデルを広げていくべき。

(政務官のまとめ)

北海道の食材のおいしさを発信し、食べに来てもらうということを発信してほしい。日本は農村の外に兼業を求めているが、ヨーロッパでは兼業もあるが、内なる兼業という形。日本のすばらしい農村社会をつなげていくことが重要。今日いただいた意見を持ち帰り、基本計画に反映させたい。

### 3. パネルディスカッション第2部

ファシリテーター：林 美香子 (キャスター / 慶應義塾大学大学院教授)

プレゼンター：森崎 博之 (クリエイティブオフィスCUE)

パネリスト：池野 富美子 (コープさっぽろ理事 食の安全担当)

近江 正隆 ((株)ノースプロダクション代表)

高橋 祐之 (えりも短角王国高橋ファーム代表)

高橋 幹夫 ((有)角屋代表取締役 / 美唄こめこ研究会会長)

食のあり方を見直すテレビ番組「森崎博之のアグリ王国北海道」出演の森崎博之氏から、北海道各地のロケを通じて発見したものをプレゼンテーションしていただいた。その後各パネリストの取組を通じて、自給率向上、農商工連携、都市と農村の交流についての課題や今後の取組の方向性についての議論が展開された。

主な発言は以下の通り。

- ・ 農家レストランやファームインは農業者にとっても元気の源になる。交流する

ことが大切。

- ・地産地消を進めることにより地域の収入も向上する。地域の農業の発展には地産地消が基本。中小企業の差別化戦略として、地域の農業生産者と手を組んでいる。
- ・東京に住んでいると東京で全て完結しているように感じてしまうが、実際は食料をほとんど外部に頼っている。東京の人にとって北海道農業の発展はかけがえのない重要なことと気づいてもらう必要。
- ・農政の制度のあり方も大事だが、「生産者がいるから生きていられる」、「消費者に買い支えられている」と、生産者と消費者がお互いに補い合っていく気持ちが重要。
- ・生産者は国に頼るばかりではなく、自ら行動を起こす必要。そのような動きをフード・アクション・ニッポンとが連携していくことが有益。
- ・米粉は少しずつ浸透してきているが、日常的に使ってもらえるよう、ブームで終わらせず文化として定着させる必要。
- ・米粉はダマにならないため、料理に失敗がなく、使い勝手が良く、シチューやグラタンは簡単に作れる。このような利点を発信していく必要。
- ・生産しない消費地に住んでいる子供たちに、生産者の思いなどを伝えることによって、支え合う気持ちや農業に対しての新たな価値観を生み出す。それが農山漁村の役割。
- ・消費者ができることは国産品を買って支えること。このために、生産者のこだわりやおいしさを消費者にしっかり伝えるのが流通の役割。

(以上)